

## 二 東京外国語学校の建学と朝鮮語学科設置

### 1 朝鮮語学科設置

#### 朝鮮語学科設置の背景

東京外国語学校に朝鮮語学科が設置されるのは、先に述べたとおり一八八〇（明治十三）年である。八五年に東京外国語学校は東京商業学校に合併・吸収されるが、それまでの東京外国語学校を旧外語と呼ぶ（以下、旧外語朝鮮語学科については主に文献⑭・史料③参照）。

朝鮮語学科設置に関する最初の記録は、七九年十月の外務省朝鮮管理官前田献吉の意見書である。

東京外国語学校内ニ韓語学ノ一科ヲ設ラレ普ク有志者ヲ募集シ其教員ハ韓語卒業ノ者ヲ撰ヒ教導セシメ傍ラ本省ノ庶務ヲ見習セルニ於テハ公務ヲ処裁調理スルノ法ヲ覚知スルノミナラス殊ニ滞京中韓語忘失ノ予防トモ可相成歟而シテ往々ハ人物ヲシテ管理官ヲ任スルヲ目的トス（史料③）

ここでは稽古通詞出身者に朝鮮語教師と外務省での見習いをさせることによって、将来の人材を養成しようという目的が示されている。この前提となっているのが、首都への外交使節相互派遣を規定した日朝修好条規第二款であった。朝鮮側は日本の外交使節のソウル常駐を拒んだが、日本側の意図は、対馬・釜山の外交ルートに代えて東京―ソウルのルートを確立することによって近世の日朝外交関係を完全に清算し、さらに朝鮮側の反対を押し切ってソウル

での公使館開設を表現しようとするものであった。したがって、対馬・釜山の朝鮮通詞・稽古通詞も東京に移して新たな外交ルートに合わせた事務を身につけさせ、さらに東京滞在中の語学力維持の方法を講じておく必要があったのである。

続いて外務卿井上馨は、一月二十日に文部卿寺島宗則宛に次のような書簡を出した。

東京外国語学校内ニ朝鮮語学之一科ヲ被設度義ニ付先般前田管理官ヨリ別紙之通り見込案差出候然者同国之儀ハ追々開港場モ増加致シ且交際之道モ益親睦ニ帰セサル可カラサレハ今日同国語学之一科ヲ開クハ実ニ必要ト存候委細ハ管理官ヨリ御引会ニ及候間篤々御協議相成度此段及御照会候也（史料③）

ここでは朝鮮語学科設置の理由として、まず「追々開港場モ増加致シ」というように、日朝修好条規で規定された朝鮮の開港場の問題が挙げられている。日本政府は、修好条規の第四款および第五款にもとづいて、既得権とした釜山での通商の他に二港の開港を朝鮮側に要求していた。このうち元山の開港が、前年の七九年に妥結していた。さらに日本政府は八〇年四月に花房義質を弁理公使に昇格させてソウルに派遣し、残り一港の仁川開港問題と、公使のソウル常駐の問題を解決させようとするのである。このうち仁川開港は交渉が妥結しなかったが、公使常駐問題はこの年十二月、朝鮮側にソウルでの日本公使館開設を黙認させて日本側の要求を押し通すことになる。「交際之道モ」云々の背景には、こうした外務省の思惑が反映していると推測される。

### 朝鮮語学科の設置

以上でみた朝鮮語学科設置に関する外務省の申し出に、文部省も積極的に応じている。一月二十三日付外務卿井上

警苑文部卿寺島宗則書簡には、

朝鮮語学之一科ヲ開クヘキ儀ニ付テハ篤ト御協議被及度御見込ヲ以テ御照会之趣領承候右ハ御見込之通該學之今日ニ必要タル儀ハ固ヨリ御用意ニ有之就ハ其方法ノ宜キヲ得候上ハ東京外国語学校内ニ韓語学ノ一科ヲ開設候様致度ト相考候尤右件着手ニ付巨額ノ金円ヲ要スルカ如キハ当省財務上ニ於テ即今多少之不都合モ有之候ヘトモ篤ト御協議之末簡便之良規相立テ成功ヲ謀リ度ト思惟候猶委曲之議ハ其辺主任ノ者ヨリ管理官ヘ商議及フ可クト存候先此段及御回答候也（史料③）

とある。さらに同日付で主任の学務局長九鬼隆一から朝鮮管理官前田猷吉宛に、生徒は官費生とすること、生徒増員に依じて宿舍を増築すること、教員には稽古通詞出身者および外務省通弁官を雇用すること、陸海軍の官費生も受け入れること、定員は二〇人以内とすることなどの具体案が提示された。

この後、外務省は陸軍省・海軍省とも協議の上、三月二十二日付で外務卿井上馨から文部卿河野敏謙宛に次のような書簡を出した。

東京外国語学校内へ朝鮮語学之一科被設度義ニ付先般来及御照会候未陸海軍省へモ生徒差出方委詳及協議候処陸軍二名海軍五名当省ヨリ拾名ニ該ル生徒へノ費用可差出苦ニ有之就テハ当省生徒十名之内四名ハ別記之者差出度余ノ人員ハ貴省ニ於テ相当之者御人撰相成様致度將又右語学教師之義ハ当分当省八等属荒川徳滋へ兼勤為致本人給料ハ当省ヨリ支給可致候得共別記生徒之内川上立一郎高雄謙三義ハ兼テ該語学修業粗熟之者ニ付助教兼務為致当省ヨリ支給スヘキ生徒費之外二川上へ屯月拾円高雄へ一月七円之給料貴省ヨリ御支給有之様致度右ニテ御異見無之候ハ、早々設立之御手順御運相成度此段及御照会候也（史料③）

これに対して河野敏謙は三月三十日に「別段異存無し」と回答し、当初の案より五名多い二五名の生徒受け入れを決定するのである。

一方、朝鮮語学科設置にともない草梁館語学所は廃止されることになり、稽古通詞の川上立一郎・高雄謙三・国分象太郎・梅村美雪の四人は朝鮮語学科に編入することになった。そのうち相当の朝鮮語学力を有する川上と高雄に、助教兼務としてそれぞれ一〇円と七円の月給を支給することになったのは、先の引用文のとおりである。

東京外国語学校朝鮮語学科は、遠くは雨森芳洲の朝鮮通詞養成計画に淵源をもち、直接的には巖原韓語学所以来の外務省の語学所を引き継いで設置されたということができるのである。

## 2 旧外語朝鮮語学科

### 生徒と教課過程

八〇年七月、朝鮮語生徒の募集と試験が行われ、外務省所属官費生五人・陸軍省所属官費生二人・海軍省所属官費生五人・東京外国語学校所属給費生八人・自費生四人の入学が許可され、先の稽古通詞四人と稽古通詞出身で領事館勤務の塩川市太郎が加わり、定員二五人に自費生四人を加えた総勢二九人の生徒によって朝鮮語学科の授業がはじまった。なお、東京商業学校との合併まで、これ以外の生徒は募集されていない。

官費生および給費生の支給額は、官費生のうち稽古通詞出身者は下等第二級以上五円五〇銭、下等第三級以下五円三五銭、新規の官費生および給費生は下等第二級以上五円、下等第三級以下四円であった。生徒たちは校舎の隣に増築された寄宿舎に入った。学課課程は表1のとおりであるが、八二年からは二期制を改め第一年・第二年……第五年と進むようになった。稽古通詞出身の川上立一郎は下等第二級、高雄謙三・国分象太郎・塩川市太郎は下等第三級、林武之助（梅村美雪改名）は下等第四級からはじまった。教科書・教授法ともおおむね草梁館語学所以前のものを踏

二 東京外国語学校の建学と朝鮮語学科設置

表1 旧外語朝鮮語学科(1880年)の教科課程

体操	国書	漢書	幾何	代数	算術	記簿法	地理	歴史	典書	作文	翻訳	話稿	対話	暗誦	説法	授語	授音	習字	第一等語学				
																			第一期	第二期			
3	6				3											単語8	諺文9	諺文3	第一期 第六級	第一等語学			
3	6				3											「交隣須知」3	「交隣須知」4	諺文2	第二期 第五級				
3	6				3							3	「口授」3			「隣語大方」3	「隣語大方」4	「孟子諺解」3	楷書3	第一期 第四級	第二等語学		
3	6				3							5	「口授」3			「隣語大方」1	「隣語大方」2	「淑香伝」4	楷書2	第二期 第三級			
3	6				3					2	2	3	「口授」3					「五箇行実」4	「善感義録」4	「解」6	第一期 第二級	第三等語学	
3	6				3					3	2	3	「口授」3					「九雲夢」4	「氏商征記」4	「解」5	第二期 第一級		
3	3	3	2	3		1				「大典会通」2	2	2	2	「口授」3						「張敬伝」3	「五経」3	第一期 第四級	第四等語学
3	3	3	3	2		1				「通文館志」2	2	2	2	「口授」4							「玉嬌梨」3	「五経」2	
3	3	3	3	2		1		1			3	2	2	「口授」4						「廢業伝」3	「崔忠伝」2	第一期 第二級	第五等語学
3	3	3	3	3					1		4	2	4	「口授」4								「八山輿地勝覽」2	

出典：『東京外国語学校一覽』1880、1881年。数字は1週当たり時間、「」は教科書名。

表2 旧外語教員一覧

年度	教員	兼嘱教員
1880		阿比留祐作
1881		住永 秀三
1882	孫鵬九	住永 秀三
1883	李樹廷	住永 秀三
1884	李樹廷	住永 秀三

出典：「東京外国語学校一覧」各年度。

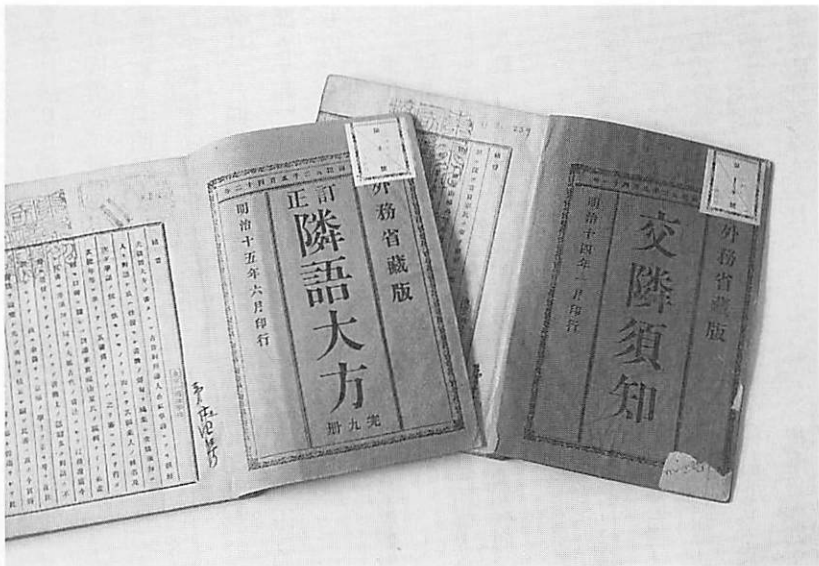
襲しており、朝鮮版四書五経の教科書も釜山領事館から文部省に移管されたものだった。このため「東京外国語学校一覧」の各年度には、「朝鮮語学ハ毎課妥当ノ教科書ヲ穫ルニ由ナシ故ニ此教科細目ノ如キハ目下仮定ノモノニ係ル」と書き添えられている。

#### 教師陣の構成

旧外語朝鮮語学科で教えた教師は、表2のとおりである。先の三月二十二日付河野敏謙宛井上馨書簡では荒川徳滋の名が挙がっていたが、実際には阿比留祐作が就任し、阿比留の釜山転勤により翌年四月から住永秀三に代わった。兩人とも外務省御用掛の兼嘱で、阿比留は畿原韓語学所生徒から草梁館稽古通詞となり、七六年の江華島談判と金綺秀修信使来航の際には通訳として活躍した経験をもつ。住永も金綺秀修信使来航の時に「準語学生」として通訳を務めたことは先に見たとおりである。一方、専任教員は八二年に孫鵬九ソンペングが就任するまでいないが、孫以前に朝鮮語学科で教授した朝鮮人がいたことを示唆する史料が二件ある。一つは先に引用した三月二十二日付河野敏謙宛井上馨書簡での付け札である。

本文之外朝鮮人東仁ナル者兼テ東京本願寺へ寄留致居候ニ付語学教師ニ雇入度之処此者義ハ公然教師へ雇入難キ事情有之ニ付本文川上高雄兩人ト東仁へ示談為致兩人助教給料之内ヨリ一月六円（川上ヨリ四円高雄ヨリ貳円——原文）ヲ東仁へ差遣内教師ニ頼入為致度文部省見込ニ有之候（史料③）

## 二 東京外国語学校の建学と朝鮮語学科設置



旧外語教科書として使用された『交隣須知』、『隣語大方』（東京外国語大学図書館蔵）

この「朝鮮人東仁」とは、開化僧として知られる李東仁<sup>トシジン</sup>のことである。李は七九年に開化派の金玉均<sup>キムヨウキョウ</sup>らの命で日本に密航、その後京都東本願寺と浅草の東京別院に留まりながら朝野の政治家や東京駐在各国外交使節らと接触している。八〇年に金弘集<sup>キムホンジツ</sup>修信使一行とともに帰国して国王の信任を得るが、八一年初、再度の日本訪問から帰国した後忽然と姿を消した。一説には大院君派によつて暗殺されたといわれるが、真相はわかっていない（文献<sup>⑬</sup>）。その李東仁に教師を要請したというのが、密航の身であるため「公然教師へ雇入難キ事情」があつたのである。ただし、当時の外国教員の月給は一〇〇円から三〇〇円程度で、助教の月給から六円を支払うといふのでは、通常の外国教員並に教授させようとしたと考えるににくい。おそらく口頭試験の試験官などとして臨時に雇用しようとしたのではないかと思われる。李の東京滞在期間は長くなかつたが、そうした形態で李が朝鮮語教育に携わつた可能性は否定できない。

もう一件は、海軍省官費生だつた大友歌次の回顧であ

る。大友は、「当時雇教官として迎へられたる朝鮮人の中に卓挺植（植カ）なる偉人」がいたが、「其の豊かなる給与を受け居りし爲にも因るものなる可きも、学校より月額二百円余の支給を一身の束縛を免かれむ爲めなりとの辞柄により固辞して受けざりし程の高潔なる人なりしなり、日本に來りて日本式に姓名を名乗りて朝野覚達と自称せし程の所謂新人開明の人物たりしなり」（文献⑪）と述べている。

卓挺植タクチョンシクもまた僧で、金玉均らと氣脈が通じ八〇年に日本に密航、東京で李東仁と合流した。卓は都合三回日本を訪れ、八四年に神戸で客死したという（文献⑫）。卓挺植あるいは朝野覚達の名は「東京外国語学校一覽」にも『文部省年報』にも現われないが、しかし大友が全くの記憶違いで右のように記述したとは考えにくい。これを裏付けるものとして、史料⑬の二つの記事がある。

東京外国語学校於テ朝鮮人卓挺植へ朝鮮語学取調等之事業去六月廿六日ヨリ当分之間及依嘱候此段及御通知候也（一八八一年七月一日付官学第四八〇号）

東京外国語学校於テ朝鮮語学取調等之事業朝鮮人卓挺植へ依嘱致シ居候処同人辞嘱申出候ニ付更ニ同国人孫鵬九へ本月廿八日ヨリ当分之間右事業依嘱候条此段及御通知候也（十月三十一日付専学第八四六号）

ここから、卓が八一年六月から十月頃まで東京外国語学校で「朝鮮語学取調等之事業」に携わったと推測できる。密航によって渡日した卓も正式に雇用するわけにはいかなかったのだが、大友の回顧と合わせると、卓の場合は依嘱という形で招請して朝鮮語を教授させたのだと考えられよう。

正式の教師として初めて現れる孫鵬九は、朝鮮政府が八一年に派遣した日本視察団（「紳士遊覧団」と呼ばれる）で朝士金鏞元キムシウワンに随行した人物である（文献⑬）。史料⑭によれば、日本視察中に孫は工部省品川工作分局で硝子製造術を研究することになったようだが、視察日程終了後は東京大学での「医学研究」を希望した。しかし日本語が不十



分なため、東京大学総理加藤弘之から日本語熟達の上翌年の生徒募集に応募するよう勧められ、孫は東京大学入学を一時断念した。この件に関して外務省と東京大学の間で公文がやり取りされたのが同年九月のことであるから、先の東京外国語学校の「朝鮮語学取調等之事業」が依頼されたのは、その直後のことになる。結局孫は次の東京大学の生徒募集を待たずに、八二年三月一日付で月給一〇〇円で東京外国語学校教員の雇用契約を結んだ（『文部省第十年報明治十五年』二）。孫は約一年半東京外国語学校で教えた後辞職し、「其膺任中授業勉勵ノ効」によって五〇円が贈られた。

孫の後任となったのが、八二年九月に朝鮮政府の実力者閔泳翊（閔妃の甥）の随員として来日した李樹廷である。月給一〇〇円、期限二年で東京外国語学校教員の雇用契約を結んだのは八三年八月九日であるから（『文部省第十一年報明治十六年』二）、来日から約一年の間があることになるが、李はその間に津田仙と接触してキリスト教を信じるようになり、三月に洗礼を受けた。その後マルコによる福音書を翻訳、八五年に『懸吐漢韓新約聖書』として横浜で刊行しており、李はこの最初の朝鮮語訳聖書で知られる人物である。李はまた教員在職中に『朝鮮日本善隣互話』（基齋蔵版、一八八四年）を刊行しているが、これは東京外国語学校の教科書としても使用されたという。八五年十月二十三日に病気を理由に辞職した李は、孫と同様五〇円を贈られ翌八六年五月に帰国したが、甲申政変以来日本留学生や亡命者に警戒を強めていた朝鮮政府によって処刑された（文献⑯）。

#### 朝鮮外交使節と旧外語朝鮮語学科

一八八〇年代に入ると、朝鮮政府は対欧米開国と開化政策を進めていくことになる。八一年には新たな外交部署として統理機務衙門を設置し、また日本人教官を招聘して洋式軍隊を編制した。さらに日本に視察団を派遣して明治維

新後の諸施設について報告させ、天津に武器製造技術などを学ばせるための留学生を派遣した。そうして八二年五月にはアメリカと修好通商条約を結ぶ。その過程で台頭してきた金玉均ら開化派も数度にわたって日本を訪れた。そもそも旧外語朝鮮語学科は設置当初から李東仁に接触していたのだが、このように相次いで日本を訪れた朝鮮の要人たちとも関係があった。

朝鮮政府の開国・開化への政策転換の契機になったのが、八〇年八月に日本に派遣された金弘集修信使である。金弘集は東京外国語学校を訪れていないが、国王への復命書では東京外国語学校に朝鮮語学科が設置されていることが報告されている(史料⑤)。孫鵬九が随行してきた八一年の日本視察団では、文部省施設視察を担当した朝士趙準<sup>チョウジュン</sup>永<sup>ニヨン</sup>一行が六月十三日に東京外国語学校を視察している(文部省第九年報「一」)。さらに「文部省第十年報」には、翌八二年五月二十七日に金玉均・徐光範<sup>ソクワンボム</sup>らが訪れたと記されている。ただし琴乘洞<sup>クムセヨンドン</sup>の「金玉均と日本」(文献②)によれば金玉均一行が東京に到着したのは六月一日であるから、日付が合わないという問題がある。その後、六月六日付で内村良蔵校長から外務大書記官宮本小一宛に、七月初旬に行う予定の第二学期定期試験に「金玉均外名臨場」を協議する書簡が出されている(史料③)。おそらく口頭試験の試験官として招こうとしたのであろうが、実現したかどうかはわからない。

朝鮮からの使節派遣の際には、東京外国語学校の生徒が通訳として動員されている。八一年の日本視察団来航の際には、外務省から稽古通詞出身の川上立一郎・国分象太郎・塩川市太郎を授業の余暇に通訳に囑託したい旨照会があり(史料⑤)、翌八二年一〇月の朴泳孝<sup>パクヨウキョウ</sup>修信使来航の際には、国分象太郎と塩川市太郎が兼囑教員の住永琇三とともに通訳をつとめ、朴の帰国の際にそれぞれ「尾扇二柄・綿紬三疋」を贈られたことが確認できる(史料⑥)。稽古通詞出身者に「本省ノ庶務ヲ見習セル」という外務省の目的が達成されたといえるわけだが、即戦力たりうる稽古通詞

出身者は、学業不振で退学となった林武之助を除き、開港場の増加などにもない卒業を待たずに公使館員・領事館員として朝鮮に赴任している。

### 3 旧外語の廃止

#### 旧外語の廃止と日清戦争

最初二九人の朝鮮語学科生徒のうち、一八八四（明治十七）年度に残っていたのは第五年生の一六人であった。八五年七月にはそのうち六人が卒業したが、同年九月に東京外国語学校は所属高等商業学校とともに東京商業学校と合併して東京商業学校となり、この六人が旧外語朝鮮語学科の最初で最後の卒業生となった。東京外国語学校の教科は東京商業学校第三部として踏襲されたが、これも翌八六年に廃止される（東京商業学校は八七年に高等商業学校と改称）。残った一〇人のその後について、詳細はわかっていない。文部省は八六年一月に外務省に対して露・清・朝三か国語の生徒の需用があるか照会したが、その回答は必要な人員が備わっているため予め欠員は期しがたいというものであった（史料④）。朝鮮に関していえば、日本は甲申政変の後、開化派の失脚、英露対立の朝鮮波及などによって、政治的・軍事的に後退することを余儀なくされていた。

こうした状況が一変するのが一八九四（明治二十七年）年の日清戦争であった。一九三二（昭和七）年の「東京外国語学校沿革」で長屋順耳校長は、次のように述べている。

森（有礼——引用者）氏の誤れる英断の酬は九年の後明治二十七年に爆発した所の日清戦争に遺憾なく顕はれたのは遺憾

極らないのである。

いざ戦争が始まつたと云ふ時に支那語、朝鮮語、露西亞語又は英、仏、独に堪能なる人多数を求めたとてさうは問屋で卸さない……加之助けてやつた朝鮮の国内には露西亞が勢力を植え後十年日露の大衝突を見なければならぬ様な原因を作つたのも一は我国人の中露語、朝鮮語に堪能なる人が少なかつたが故である。

このような日清戦争の「反省」のもと、九六年第九帝國議會において、貴族院・衆議院が外国語学校開設を建議する。衆議院の建議によれば、「今や我国八一躍シテ東洋ノ表ニ雄視シ宇内生存競争ノ衝路ニ当ル」ようになったのだから、特に「魯清韓ノ如キハ將來益ノ密接ノ關係ヲ有スルモノニシテ今猶其ノ言語ヲ教授スルノ学校ナク外交モ商業モ殆ト模索以テ之ニ応セムトス樽俎ノ際折衝ノ時麻姑ノ癢ヲ搔クノ快ナキハ豈雄資ノ一大欠点ニアラスヤ」というわけである（文献⑳）。そうして九七年四月、高等商業学校に附属外国語学校が附設され、そこに韓語学科が設置されることになる。これに入る前に、しばらく日清戦争前後の朝鮮について、旧外語朝鮮語学科卒業生六人の一人である鮎貝房之進（槐園）の活動と合わせてみておきたい。東京外国語学校所属給費生だった鮎貝は、周知のとおり後に「雑攷」全九輯などの著作によって朝鮮史・朝鮮語研究者として知られるようになる人物である。

### 鮎貝房之進と朝鮮

八五年の卒業の後、鮎貝は一時郷里の気仙沼に帰つたが、八七―八八年頃には再び上京して兄で歌人の落合直文の家に寄寓していた。その鮎貝が「折角朝鮮語をやつたのであるから朝鮮に渡つて何かやらうと思つて居たのですが、丁度教育事業をやらなかつたか」と云ふ者があり「朝鮮に渡つたのが、「明治二十七年日清戦役の始る少し以前」のことであつた（文献㉑）。教育事業の斡旋をしたのは、朝鮮語学科の同級生だった国分象太郎（公使館通訳生）・大木安之助



42歳当時の鮎貝房之進

(領事館書記生)・塩川市太郎(領事館通訳生)だったという(文献⑫)。  
このころ朝鮮半島の南部で甲午農民戦争が勃発、事態の収拾に窮した朝鮮政府は清に軍隊の派遣を要請したが、これに対して日本も朝鮮に出兵した。日本政府は朝鮮の内政改革などを理由に軍隊を駐留させ、七月二十三日に王宮を占領して閔氏政権を打倒、二十五日に清国艦隊を奇襲攻撃して戦闘状態に入る。二十七日には大院君を担ぎ出して金弘集を首班とする親日開化派政府を樹立させた。

先の大友歌次によれば、「氏(鮎貝——引用者)の学問と徳性は氏が韓語を良くすることに より大院君の愛を受くるに至り自由に雲峴宮に出入するを得た」(文献⑪)と、鮎貝は大院君と親交をもっていたという。大院君は九四年末に公使として赴任した井上馨によって再び下野させられるが、すでに矢継ぎ早に内政改革を断行しつつあった開化派政府はさらに改革を推し進めていった。甲午改革と呼ばれるこの改革で外部(外務)大臣を務めた金允植キム・ユンシクとも、鮎

貝は親交を結んでいる。

鮎貝が携わった教育事業とは、具体的には下関条約の直前にソウルで設立された乙未義塾のことである。この学校は私立であったが、実質的に開化派政府の補助金で運営され、日本語と日本語による普通学を教授したという。鮎貝は、落合直文門下で旧知の与謝野鉄幹とともにこの学校で教えたのである(文献⑳)。しかし乙未義塾の開校直後、朝鮮の政情は一変する。その間の有様について、鮎貝は次のように回想している。

所が日清戦役がすみ、三国干渉の問題もあり、朝鮮政府の様子も随分変つて参り、吾々の事業もひどい圧迫やら防害ぼうがいを受ける様になり、一般にも日本排斥の風兆が盛でありました。有名な乙未の事変は丁度二十八年の十月八日に起つたのであります。私も此の事件には関係もいたしましたが、私は領事館の某書記官？（或は堀口領事館補か——原文）と主に聯絡をとつた。……事変後、三浦公使始め広島の獄に収容されましたが、私は皆の勧めで、裁判が終るまで約七か月程木浦に難を避けて居りました。（文献⑩）

三国干渉を機に国王・閔妃が巻き返しを謀り、朝鮮政府の中に排日の気運が生じてきた。事態を悲観した井上馨は公使を辞任し、代わりに赴任した三浦梧楼関与のもと、日本人浪人らが朝鮮軍人のクーデターを装って閔妃を殺害、大院君を再び担ぎ出した（乙未事変）。事変後成立した親日派政権が三人の朝鮮人を実行犯として裁判にかけ処刑したこともあり、広島に送られた関係者五六人は無罪となったが、朝鮮では日本と親日派政権に対する敵愾心が高まり、翌九六年二月には国王がロシア水兵に保護されてロシア公使館に移るいわゆる俄館播遷事件が起こつて、親日派政権は崩壊、日本の勢力は再び後退することとなった。先の長屋校長の「日露の大衝突を見なければならぬような原因」とは、このような経緯によつてもたらされたのである。